バウムテストの根と地面の描画スタイルと成人の愛着スタイルの関連

――親密な対人関係，居場所感，対人ストレスコーピングに注目して――

18005PCM　杉山　竜平

Ⅰ．問題と目的

青年期は，それまでの親への依存的な生活形態を離れ，精神的，経済的な独立を果たすための過渡期である。この時期には自己の内面に意識の焦点が当てられやすく，対人関係や進路についての不安や悩みが増すことが多い。青年期の中でも，17 歳から 22 歳前後までの青年後期は，統合失調症やうつ病といった精神病が出現しやすい時期である（加曽利，2004）。青年期における精神的健康を考えるうえで心理アセスメントの重要性は言うまでもないが，質問紙調査の短所として対象者の意図や，検査への構えが直接的に反映されやすいということがあり，対象者の内面をどの程度正しくアセスメントできているのか把握しにくい面がある。従って，対象をより正確に把握するためには質問紙法に加えて，無意識過程を反映するとされる投影法が組み合わされることが必要となる（加曽利，2004）。藤田（1989）はバウムテストと質問紙法との関連を研究し，バウムテストの特徴を予測する可能性を探索した。

Koch（1957）は根の描画について，根源的性質，原始性，本能，無意識，重さ，支えを求めるといった象徴的意味を表す指標であると述べ，佐藤（2011）は根の描画の各指標と自我機能，攻撃性との関連を検証し，根の描画が精神的な病理と関連して自我機能の低さ，攻撃性の高さを表すことを示した。

青年期における愛着スタイルと居場所感の関連を検討した研究において，石本（2010）は居場所感が自己肯定意識に影響しており，大学生において居場所感が高いほど心理的適応が高くなることが示唆された。これらの先行研究から，青年期の愛着スタイルと居場所感には関連が示唆されており，愛着スタイルが居場所感を規定するような行動や意識（評定）にかかわっているといえるだろう。従って，バウムテストで根や地面が描かれた場合，それは個人の置かれている環境や根づいている居場所の反映であると考えられ，尺度において意識的側面を，バウムテストで無意識側面を示すのではないだろうかと考えられる。

金政（2005）が行った青年期の愛着スタイルと感情調節ならびに対人ストレスコーピングとの関連の研究では，青年期の愛着スタイルと対人関係におけるストレスコーピングスタイルの関連が示され，安定型では自己観と他者観が高く，ポジティブ関係コーピングと正の関連がみられた。不安定型においては自己観と他者観のいずれかもしくは両方が低く，ネガティブ関係コーピングと正の関連がみられた。このように，愛着のあり方や居場所感のあり方が，バウムテストにおける根と地面の描画に影響を与えると考えられるとともに，対人ストレスコーピングにも影響を与えていると考えるならば，バウムテストにおいても根と地面から枝にかけての描画に何らかの形で反映されているのではないかと考えられる。本研究では，研究Ⅰと研究Ⅱに分けて，青年が描くバウムテストの根と地面および枝の描画スタイルに，個人の愛着関係のスタイルと居場所感，対人ストレスコーピングがどのように関連しているのかについて検討する。

Ⅱ．研究Ⅰ

1.調査協力者

私立 A 大学に通う大学生・大学院生 226 名（男性 52 名，女性 174 名）を分析対象とした。回答者の平均年齢は 20.43（$SD = 0.96$）であった。

2.質問紙の構成

①親密な対人関係体験尺度（the Experiences in Close Relationships inventory）の一般他者版（中尾・加藤，2004），②居場所感尺度（石本，2006），③対人ストレスコーピング尺度（加藤，2000），

④フェイスシート, ⑤個別面接に対する協力依頼のための連絡先記入欄。

3.結果と考察

愛着スタイルと居場所感尺度の一元配置分散分析の結果,「自己有用感」において愛着スタイルの主効果がみられ（$F(3, 195)=3.992, p<.01$),「本来感」においても愛着スタイルの主効果がみられた（$F(3, 195)=10.089, p<.001$)。愛着スタイルと対人ストレスコーピングスタイルの一元配置分散分析の結果,「ネガティブ関係コーピング」において愛着スタイルの主効果がみられた（$F(3, 222)=8.004, p<.001$)。渡邉・岩瀧・山﨑（2018）の先行研究では友人関係において幸せに満ちた時間を過ごすことは積極的に問題を解決するか, 問題の解決を先送りしてことを荒立てないこと方法の採用との関連を示唆しているが, これは対人関係上の問題が発生しても対人関係を断ち切ることのない, 少なくとも対人関係を現状維持すると結論付けているが, これは本研究結果においても同様の特徴が示唆されていると考えられる。いかに事態を悪化させずに対人関係を現状維持するかが重要な課題としてあるのだろうと思われる。

Ⅲ．研究Ⅱ

1.目的

バウムテストの根と地面および枝の描画スタイルと個人の愛着スタイル, 居場所感, 対人ストレスコーピングの関連を質的に検討する

2．方法

①研究協力者及び調査時期

研究Ⅰの質問紙調査において調査面接への協力を承諾した者 20 名（男性 3 名，女性 17 名）を対象に，バウムテスト（2 枚法）と半構造化面接を個別に実施した。

3．結果と考察

安定型ではタイプⅠが多くみられ, 居場所感が低い者, 解決先送りコーピングを用いる者が多かった。枝の描画は二線枝と成熟した形で, 枝の広がりは単純なものと分枝による広がりがみられ, 安定型においては対人関係や適応の仕方がさまざまであり, 環境への柔軟な対応をとりやすいことが考えられるだろう。愛着軽視型ではタイプⅠで多く，タイプⅡでもみられ，居場所感が高く, コーピングスタイルは全てみられたが, 根の描画がないことが共通しているが，根（愛着対象）を重視しないためにバウムテストにおいて根の描画がなされなかったのではないだろうか。とらわれ型ではタイプⅢが多くみられ, 居場所感はあるが低く感じるものが多く, ポジティブ関係コーピングを用いるものが多かった。枝の描画としては二線枝か枝がない場合が多く, 二線枝では分枝による広がりがみられた。また地面が描かれないこと，浮いた根が描かれることについては，見捨てられ不安の高さや自己のIWMがネガティブであることを表しているのかもしれない。つまり地面に根差すことができないことが描画に反映されているのかもしれない。恐れ型ではタイプⅡが多く，居場所感がない者，ネガティブ関係コーピングを用いる者が多かった。また，恐れ型のネガティブ関係コーピングにおける枝の描画は, 二線枝で描かれ, 分枝による広がりをみせるという固定的なパターンであった。恐れ型では対人関係においてストレス時に他者をネガティブに捉えるという固定的で不適応的なパターンをとりやすいのかもしれない。

Ⅳ．総合考察

タイプⅠでは根や地面の描画がないため枝が一つの指標となり, とくに二線枝で描かれている場合はより成熟した方略を取るのかもしれない。タイプⅡでは根が描かれず, 枝が分枝によって広がっているものでは愛着対象の希求を無意識下に抑制しているものの, 対人関係において抑制した愛着対象への気持ちが無意識的に行動に反映なのかもしれない。タイプⅢでは二線枝の分枝による広がり, 末広がりの根が描かれた場合はとらわれ型の特徴であり, これは相手との関係にのめり込むというとらわれ型の特徴を表しているのかもしれない。タイプⅣにおいては 2 枚目の描画で適応的に修正されているものは安定型が多かったことも特徴だろう。これは環境の変化に対して, 自身の安定を図るために適応的に修正できる能力をもっているものと考えられるだろう。